

グリム兄弟のその政治的立場

橋 本 孝

1. はじめに

グリム兄弟は『グリム童話』、正しくは『こどもと家庭の童話』の収集編纂者としてあまりにも有名である。しかしそれだけではなく、『ドイツ民話』を収集し、『ドイツ文法』など言語学者としても大きな業績を残している。さらに『法律古事誌』を著したり、『ドイツ語辞典』を編纂している。しかしわが国ではもっぱら『グリム童話』の研究が多く、その他の研究の多くは付け足しのようには見えぬ。

彼らが童話を収集しただけなら、本当はこれまで世界的に研究されなかったのではないだろうか。また童話の内容の解釈だけではグリム兄弟は理解出来ない。なぜ童話や伝説、民話を集めたのか、またなぜ言語に関心を寄せたのか。このことを知るには彼らの時代を考察しなければならない。

彼らの生きた時代は激動の時代であった。ドイツは300ほどの小国家に分裂し、統一にはほど遠かった。そのために政治の波に彼らも巻き込まれて行くのである。その中でグリム兄弟はどんな態度をとったのであろうか。そのあたりを考察することによって、われわれはなぜ彼らが必要に童話や民話を集め、言語を歴史的に考察したのかが明らかになるのではなかろうか。このことを明らかにしようと試みるのが本稿の目的である。

2. フランス革命の余波

彼らのまだ小さいとき、フランス革命の余波はドイツの片田舎シュタイナウにも伝わってきた。四番目の弟で画家のルートヴィヒは「フランス革命の時代にぼくたちのところも不穏になりました。ひっきりなしに軍隊が行進し、ある時はフランス人、ある時はオーストリア人、オランダ兵やプロイセン軍、マインツ人やヘッセン人らが通過して行きまし

た。…ぼくたちはいつも窓辺にいました。母は心配して、ぼくたちを学校や道路に出してくれませんでした。…多くの人たちは農耕馬を持ち、大抵の者は農民帽をかぶっていました。時折ぼろぼろの衣服を着た囚人も見られました。彼らは両手を鎖でしばられたり背中まで縄でしばられたりして、連隊と連隊の間を行進していました。人々はあれは囚われたスパイだよと言っていました。多くの兵隊たちは腕を包帯でしばったり、負傷した頭を布でしばっていました。多くの車は負傷した人や瀕死の人でいっぱいでした。」と書き記し、当時11才であったヴィルヘルムはギロチンに架けられるルイ16世の水彩画を描いている。このことからグリム兄弟たちにフランス革命の爪痕がどんなに大きかったかが分かる。

シュタイナウで兄弟は父を亡くすことになる。幼い兄弟は父と住んでいた官舎を後にして、近くに家を借りる。一気に貧困が彼らを襲うことになる。しかし気丈夫な母は大勢の息子と娘の面倒を見る。兄のヤーコブは幼いながらも母をかいがいしく助ける。

3. カッセルからマールブルク

1798年グリム兄弟の内ヤーコブとヴィルヘルムは叔母を頼ってカッセルに赴く。宮廷勤めの叔母も決して裕福ではなかったので、カッセルのマルクトの側の安い下宿を借りる。二人はここの中学・高校に通い優秀な成績をあげる。1802年17才でヤーコブはマールブルク大学に入学する。一年後ヴィルヘルムも兄の後を追ってマールブルクに赴く。ヤーコブはここでも苦い体験をする。「マールブルクではくは儉約した生活をしなければならなかった。母が官吏の未亡人で国家のために5人の息子を大きくしたのに、あらゆる約束は無視され、ほんの僅かの援助金を貰うことすらままたらなかった。それに比べ、マールブルクのぼくと同級生にはたっぷり奨学金が与えられた。彼はヘッセンの高貴な貴族で、いつかはこの国の大金持ちの地主になることになっていたからである」と嘆いている。彼は現実の政治の醜さを体験するのである。

マールブルクでヤーコブとヴィルヘルムは経済的に大変だったけれども、ザヴィニー教授を知ることによりころがなごむ。当時大学には神学部を除いて建物はなく、授業は教授の自宅で行なわれたので、グリム兄弟はザヴィニー教授の家に行く。教授は文学にも造詣が深く、多くの蔵書があった。ザヴィニー教授は『占有権論』を著し、すでに名声を博していた。後に『中世ローマ法史』を世に問い、歴史法学を確立する。彼は「法は言語と同じく民族精神の発露であり、それは民族の歴史とともにのおのずから発展するもので、抽象的思弁によって人為的に制定されるものではない」と主張した。このことはヤーコブの

みならずヴィルヘルムにも大きな影響を与えることになる。

ザヴィニー教授と知り合ってから、グリム兄弟はドイツの中世文学にところを開かれる。さらにまた、ドイツ・ロマン派の人たちとも交流のあったザヴィニーは兄弟を彼らに引き合わせる。すなわちアヒム・フォン・アルニム、クニグンデ・ブレンターノ（のちのザヴィニー夫人）、弟のクレメンス、妹のベッティーナ（のちのアルニム夫人）たちである。

グリム兄弟はとりわけクレメンスやベッティーナ（のちにベッティーナの娘とヴィルヘルムの息子が結婚することになる）と兄弟のような親交を結ぶ。

こうして偶然とはいえ、これらのロマン派の人たちは皆親戚になってしまう。目に見えない縁の糸で結ばれていたのである。

ロマン派の人たち（文学史的には後期ロマン派と言うべきだが）は何をしたのだろうか。それはドイツ民謡を集め、『こどもの魔法の角笛』を出したのである。これはヘルダーのいう民謡の調べの素晴らしさを集大成したものとなった。民謡はドイツ人のルーツを知るために大切であった。分裂していたドイツはそれぞれの小国が自分の民謡を持ってると思い、ドイツ全体などに目が届かなかった。そこにこのようなドイツ民謡集が出たのであるから、影響は大きかった。この民謡集編纂にはグリム兄弟も手伝った。この民謡集はドイツ人のファンタジーの本質を示すとともに、それぞれ分裂した国家に「ドイツ文化の統一」を示すものとなった。それなどがきっかけで兄弟はドイツ民話や童話を集め始めるのである。

4. ヨーロッパの政情不安とパリ

兄弟のマールブルク時代に既にヨーロッパの政情は変わった。1804年フランスではナポレオンが王座につき、ロシア、オーストリア、イギリスはフランスに脅威を感じた。翌年1月ナポレオンはイタリア共和国が世襲の王国になると、自らその王位につき、ジェノワをフランスに併合する。イギリスはロシアと同盟を結び、のちにオーストリアがこれに参画する。ヨーロッパはにわかに政情不安になって行く。こんな中でパリに赴いたザヴィニー教授からヤーコブ宛てに一通の手紙が届く。パリに来て自分の研究を手伝って欲しいというのである。ヤーコブはそれを承諾し、1805年2月パリに行く。パリの街は荒れていたけれど、古い建物には興味を掻立てられ、パリにいろいろの人種がいるのに目を見張った。また美術館での巨匠の絵に感動し、劇場ではコルネイユやラシーヌの悲劇を観た。しかし日曜以外の日には朝の10時から翌朝の2時まで図書館で働いた。無味乾燥な厳しい仕事

続いた。自分が情熱を注げる研究をしたくなったヤーコプはヴィルヘルムに「自分の好きな研究の出来る時間が欲しい」と書き送っている。さらに「愛しいヴィルヘルム、ぼくたちはこれからは決して分かれるようなことはすまい。仮にひとりを何処かへやろうとすれば、もうひとりが直ぐ断ればいい。ぼくたちは一緒にいることに慣れているから、わかれわかれになることはぼくを死ぬほど悲しみますことになるだろう」と書いている。このことは一般に兄弟愛の象徴のように解釈されているが、それだけではなく、ドイツ人全体もそうあって欲しいと願ったのではないだろうか。ドイツ人は別れていてはいけない。一つになっていなければ、ヨーロッパで取り残されてしまうと考えたのではないだろうか。そうでないと、あまりにもこの手紙は歯の浮くような文章である。ストレートに書けば、ドイツには届かなかったかもしれない。なぜなら、ナポレオンはその前にイギリス王家の発祥の地ドイツのハノーファーを占領していたからである。1805年秋パリでの仕事を終えたヤーコプは帰路トゥリアに立ち寄り、そこの図書館司書ヴィッテンバッハを訪れ、古代ドイツの素晴らしい文学を徹底的に研究するという自分の決意を語る。そのあとマールブルクに弟のヴィルヘルムを迎えに行き、一緒に母（彼女は1805年シュタイナウからカッセルに移っていた）のいるカッセルに戻る。

5. 他国支配のカッセル

ヤーコプは自分の決意通り、法律の勉強をやめ、自分に合った職を探す。ヴィルヘルムは大学を卒業すべく再びマールブルクに戻る。やっとのことでヤーコプはカッセルの軍師団秘書の職を手にする。パリ時代とは変わって、軍服を着たヤーコプにとってこの職は「つまらない」ものであった。ヤーコプは「でも満足している、暇な時には文学の研究に向かうことが出来たから」と記している。しかしこの暇はそんなに長続きしない。

一年後ヴィルヘルムは大学を卒業し、カッセルに戻る。

その間にもヨーロッパの政治情勢は刻々と変わっていく。オーストリアのフランツ 1 世が神聖ローマ帝国の皇帝を放棄する。そのことによって1806年神聖ローマ帝国は遂に終りを告げる。この時300以上に分離していたドイツはおよそ30ほどの領邦国家に整理される。その年ナポレオン軍はプロイセンとロシアへ進行する。イエーナとアウエルシュテットの戦いでナポレオン軍はプロイセンを破る。その数日後フランス軍はカッセルを占領。ヘッセン・カッセルのヴィルヘルム 1 世は妻のヴィルヘルミーネ・カロリーネと家族全員を連れて逃げることになる。

ヴィルヘルムは「これまでの全ての状況が崩壊したあの日は、いつも私の目前に浮かびます。遠くにはフランス軍の松明が見え心配でした。でもヘッセンが他国の支配になったとなど、翌朝フランス軍が進入して来るのを見るまで信じませんでした。…やがて全てが根本から変わりました。見知らぬ人間たち、見知らぬ習慣、道路や散歩道で大声で話される外国語。私は常に他国の支配の中にいる屈辱を感じました」と書いている。

やがて新たにつくられたヴェストファーレン王国の王として、ナポレオンの一番下の弟ジェロームがカッセルに着任した。もちろん軍にいたヤーコプは職を辞める。その間グリム兄弟は『こどもの魔法の角笛』の2巻、3巻の編集の手伝いをする。この仕事を通して、さらにナポレオンの支配によって、ヤーコプとヴィルヘルムの兄弟はドイツ人のアイデンティを求めることの必要性を痛感した。

ヤーコプ23才の年に母が他界し、ヤーコプは兄弟の面倒をみなくてはならなくなる。そこでフランス語の出来る彼はパンのために、1808年ジェローム王の図書館司書となる。ここで彼は毎日自分の家から、カッセルのヴィルヘルムヘーエにある図書館まで10キロの道を徒歩で通った。1年後枢密顧問陪席官にも命じられた。そのため否応なしに政治の場に出されることになる。しかし贅沢は言っていられない。一家を支えるために働かなくてはならない。さらに弟ヴィルヘルムが健康を害し、ハレでの療養が必要となったため、一層辞められなくなる。ヤーコプは仕方なしにこの仕事を続けるのである。

1810年ヴィルヘルムが療養からカッセルに戻ると、二人は時間をみつけては、一緒に自分達の好きな研究に没頭した。

1813年10月ライプツィヒ郊外での諸国民戦争によってことは一変した。これはドイツ人にとってはナポレオンからの解放戦争であった。かくして、ナポレオンの欧州支配の夢が断たれ、エルバ島に流される。ナポレオンの失脚は、ドイツ人を喜ばせた。前ヘッセン選帝侯のヴィルヘルム1世が戻ってきた。ヤーコプは「この王の帰還は書き表わせないほどの歓喜であり、…大好きなばくの叔母も戻ってくる…」とその喜びを表わした。

6. 公使秘書としてのヤーコプ

ジェロームの図書館がなくなると、ヤーコプはヘッセン選帝侯ヴィルヘルムの公使付書記官に任ぜられ、公使のお供をしてパリ平和条約締結のためパリに赴く。パリには連合軍が進駐していた。ヤーコプは気持ちを高ぶらせてはいたが、カッセルに次のように知らせる。すなわち「私は喜びと感謝の気持ちで一日中われを忘れていた。でも今朝はドンチャ

ン騒ぎをした舞踏会のあとのように思われる」と。歓喜の後には懷疑と苦しみがあったからである。彼は続けて「平和条約は誇りうるものではないし、非ドイツ的で、ひそかに処理され、まったく頼りにならないものである」と言っている。

グリム兄弟の友人ゲレスはドイツで最初の政治新聞「ライン・メルクール」を発行したが、その中で太陽系にならって、プロイセンとオーストリアを二つの極にして、楕円形を描き、そのようなドイツ国を想定した。この考えにヤーコプはくみしているが、ベルリンとヴィーンを機軸の不均衡にたいして異議を唱えている。その上「ドイツの内面的体制の基本に皇帝制を置くこと」を主張してた。すなわちハプスブルク家の再建である。「ドイツを一つにするにはそれが最善の方法である」とまで言い切っている。しかしよくみると個性の尊重を重視しているのである。したがって皇帝制は手段であって、個性の尊重が彼の主眼である。そのことをわれわれは見落としてはならない。「どの国家も独立して存在する個性である」と言うのがフリードリッヒ・シュレーゲルなどのロマン派の基本的な考えであるように、国家の基本的な核は家庭であり、家庭こそは個人の個性を守ることから成り立ち、個性を守るのに最善のものが家庭なのである。家庭の構成員は横並びではなく、縦ならびに、年上から年下のように歴史的に構成されている。このようにして家庭の単位で構成されてはじめて、国家が出来上がると言うのがグリム兄弟の基本的な考えであった。ところがそのようなことが、早くも平和条約の交渉の中で挫折するのである。

7. ヴィーン会議におけるヤーコプ

そんな中でヴィーン会議が招集される。ヤーコプも公使秘書としてヴィーンへ行き、会議は踊るで有名なヴィーン会議に出席する。会議ではナポレオン後のヨーロッパの再編成が問題となった。ゲレス主宰の「ライン・メルクール」にヤーコプは「国の分割の仕事を外交官は惨めな政治家で、途方に暮れ、絶望的である」と書いている。彼は単なる秘書にすぎないため、なんの助言も出来ない。ヴィーン会議の結果はヤーコプにとっても不満と失望だけが残った。ヤーコプの思惑とは違ったように領土の分割が実施された。ザクセンの北部の半分はプロイセンに、ロシアはポーランドの大部分を手に入れた。そしてポーランド南東部からウクライナ北部のガリチアはオーストリアに帰属した。

ナポレオンがセント・ヘレナに流されてから、二度目の和平交渉のためヤーコプは1815年パリに赴き、これで3度目のパリ行きとなった。彼の思惑通りに行かず、外交官の仕事は彼には苦痛であった。

ヤーコプはヴィーンでは「何日も悲しみに耐えて」いた。このことはヤーコプが政治的な成り行きに大に関心があったことを示している。「ライン・メルクール」にドイツの新体制についての希望を述べたが、ことごとく挫折し、「外交官の仕事にとどまりたくない」と言った。

1816年3月「ライン・メルクール」は余りにもリベラル過ぎるということで発禁にされてしまった。しかしその数か月前にヴィルヘルム・グリュムはこの雑誌に寄稿し、民主政治の必要から「ヘッセンでの国会」の開催の必要性を説いている。

領邦会議（一種の国会）の開催は1815年3月1日のヴィーン会議の決定に基づき、ヘッセンでも開催されることになった。これは新憲法制定を意味していたので、ヴィルヘルム・グリュムは歓迎した。「公的な法秩序を打ち立てることは大切である・・・なぜなら君主の真の力は、民衆の中にある習慣的な権力に過ぎないからである。19世紀には民衆の気持ちの中に根付かないような王家など存在しない」と言っている。しかし法的な生活は当時はなく、民衆や支配階級の公共性の欠如や官僚制についてヴィルヘルムは批判して、「基本法」の制定を強調している。カントが言うように「法は決して政治に合わせてはならない。そうではなくて、政治が常に法に合わせられねばならない」のだから。

最初の憲法が出来るのがザクセン・ワイマルのカール・アウグスト公によるものである。それは1816年のことであった。ヘッセンにはまだ憲法の制定はない。カッセル選帝侯のヴィルヘルム1世は若い頃なんのためらいもなくヘッセンの若者を兵隊としてイギリスに売っていた。しかしフランスに占領され、またそれから解放されると、少し考えが变り、領邦会議を開催することを計画する。グリュム兄弟はそれを歓迎した。しかし1816年議会開催はあっさりと反古にされる。弟ヴィルヘルムの危惧していた通りになった。1819年11月ザヴィニーに対してヤーコプは「ドイツにおいて領邦憲法が制定されると、そこから大方の利点が生まれる。領族たちは、逡巡しないで、減税や管理運営の簡素化に精力を集中すればいいのだ」とヘッセンやその他のドイツ諸国家の現状を嘆いている。

8. カールスバートの決議

1819年カールスバートでドイツの10大領邦による大臣会議が開催される。これを開催したのはドイツの各領邦で学生たちが祖国ドイツの精神的統一の学問と自由を叫び、全ドイツはドイツ人の祖国であることを決議するに至ったからである。特にイエナの^{ブルシェンシャフト}学生組合運動はドイツ14の大学に波及し、現在の国旗となった赤と黒と金の三色旗を持って、1817

年10月ヴァルトブルクに集合した。そこでは、ルターの宗教改革300年祭とライプツィヒ戦勝4周年記念祭が催された。学生たちはヴィーン会議の決定に不満で、「自分たちの希望が断たれた。今こそ祖国の統一と自由のために戦う」ことを決議する。そこで自由と祖国の敵の書物が焼かれた。これが有名なヴァルトブルクの焚書事件である。ヴァルトブルクでは全ドイツ学生組合の設立が宣言された。これを苦々しく思ったのがメッテルニヒで、彼はカールスバートでドイツの10大領邦による大臣会議を開くのである。そして自由主義弾圧法をつくりあげた。それによって学生組合運動は弾圧された。弾圧されたのは学生だけでなく、学者も多く大学を追われた。こんな中であってヤーコプはヘッセンの検閲委員会のメンバーとなる。この仕事は兄弟がゲッティンゲンに招聘されるまで続く。この委員としてヤーコプは発禁になったり危険視されていたゲレスの著作などを良い本に選定した。彼は友人のアルニムに宛て、早くから政府による自由な発言の禁止を不愉快に思っていることを述べる。彼の反骨精神がこゝでも発揮されていることをわれわれは知るのである。この委員会にヤーコプを推薦したのはヴィルヘルム1世であり、その妻ヴィルヘルミーネはグリム兄弟をなにかにつけかばった。

1822年ヴィルヘルム1世が亡くなり、翌年ヴィルヘルミーネがあとを追うと、ヴィルヘルム2世が玉座につく。このことで、グリム兄弟にとっては状況が悪い方へ傾く。兄弟の発言を苦々しく思っていたヴィルヘルム2世は兄弟に辛くあたった。その上これまで兄弟を可愛がった図書館長が亡くなると、まったく事情を知らない図書館長を頭に据えた。遂にグリム兄弟にとってカッセルは住み辛いものとなった。このような中で兄弟はゲッティンゲン大学からの招聘を受ける。故郷を離れることは辛かったが、カッセルでの状況があまりにも悪かったので、二人はカッセルを離れることを決意する。

9. ゲッティンゲン大学7教授事件

ゲッティンゲン大学での就任演説でヤーコプは「祖国愛」について語り、「領邦君主はちゃんとした有効な秩序の担い手であるが、この信仰がカッセルで激突した」と述べている。さらに1830年9月現状をよく知っているヤーコプは「君主たるものは誠実に、なんでも支配出来る時代は過ぎたこと、はかない君主の個人的な性格の中にある安全性より他の安全性を望んでいることを認識しなければならない」とザヴィニーに書き送っている。この「他の安全性」とは重要なものはすべて立法によって保証されることを意味しているのだ。

1830年はフランス7月革命が勃発し、その波がベルギーやポルトガル、スペイン、ポー

ランド、ドイツにも押し寄せる。ドイツでは特にブラウンシュヴァイク、ザクセン、クアヘッセン、ハノファーである。多くの人々は革命を予感する。ヤーコプは「革命的な気分が近付けば近づくほど、自分はリベラルな、否、革命的な気分背を向けられない」と告白している。しかし同時に彼は君主制を擁護する。この君主制は長年に渡って国民の安全と平穏を守ってきたからである。その上ヤーコプは「人間はもともと不平等である」として、「命令することと従うこと」の中に「穏やかで慈善の力が作用している」のを見ている。また「この力が作用しているところにいっぱい色彩やファンタジー、ポエム、信仰が生まれる、でも一方で現在が求めているものは単調で、散文的でしらけている」と言っている。このことは一見矛盾しているように聞こえるかもしれないが、ロマン派の基本的な考え方を考えれば当然である。すでに見てきたように、ロマン派は個性を重視する。だから人間が平等であることは個性の否定につながるので、これを排除する。人間は「自由」でなくては本当の「個性」は発揮出来ない。そこで「個性尊重」と「自由」をヤーコプも強調するのである。

しかしヤーコプは現行の君主制を肯定するのではなく、法の下での君主制、すなわち統一されたドイツの立憲君主制を期待するのである。君主制と言っても全ての国は領主の単位、地方行政の単位、家庭の単位から成り立っていなければならない。これがヤーコプ・グリムの政治的ゲマインシャフトの理想的な姿である。

ゲッティンゲンは当時ハノファー王国に所属していた。ハノファー王ヴィルヘルム4世は1833年に憲法を制定した。その憲法の草案は歴史学者で、憲法学者でもあるダールマンやオスナブリュックのリベラリストで議会議員のシュテューベらのてによったものである。

グリム兄弟はその憲法に基づいて国家に仕えることを誓ったのである。ところが、1837年この王が亡くなると、弟のエルンスト・アウグストが王位を継承する。数日も立たないうちに議会の解散と憲法の無効を宣言した。

これによって、いわゆるゲッティンゲン7大学教授事件が起こるのである。グリム兄弟、アルブレヒト、ダールマン、ゲルヴィニウス、ヴェーバー、エーヴァルトの7人の教授たちである。1837年11月7日に抗議文を草案し、翌日王へ送る。当時ゲッティンゲン大学には37名の教授がいたが、その内の7名がこの抗議文にサインしたのである。特に医学部の教授たちはこれに難色を示した。しかしこの7名は黙っていなかった。彼らは忠誠への誓いを守ることは良心の問題であるとして抗議をした。王はただちにこの7名に対して無期

限の退職を勧告した。解雇通知は同年の12月14日に届く。この通告には「3日以内にハノーファ王国から去る」ことを命じていた。すなわち国外追放である。学生たちはこれに怒りを上げたが、警察によって阻止された。そして警察と軍隊の監視のもとで、多くの学生は歩いて、ヤーコプやダールマン、ゲルヴィニウスの3人をヴィツェンハウゼンの近くのヴェーラ橋まで見送った。「ヤーコプは帽子をとって高く揚げ、輝くような赤い頬をして、とても若々しく見えた」とヴィルヘルムはドイツ文学者のラッハマンに知らせている。ゲッティンゲンのこの事件はすぐさまドイツ中のみならず外国にも知れ渡っていった。

ヤーコプは「私の解任について」と題して弁明書を書く。弁明書はドイツで印刷されることはなく、スイスのバーゼルで刊行され、その本はドイツのみならずヨーロッパ中に広まった。この書の中で「歴史は私たちに高貴で自由な男たちを教えてくれる。彼らは王たちの目の前で敢えて完全な真実を述べた。そうすることに勇気を持っている人にこそその権限があるのだ。時として彼らの告白は実を結んだが、また時として朽ち果てたこともある。しかし彼らの名前を損なわせることはなかった。歴史の残照である詩歌ですら正義に照らして、君主たちの行為をじっくり考えることをやめはしない。このような実例が示すように、苦難が来れば、家臣の口も開くものだ。そして彼らがやったことを慰めてくれる」と書いている。ヤーコプが自分たちの行為に対してどんなに誇りを持っていたか分かる。

こうして、彼らはパンを失うことにはなったが、しかし名声はドイツのみならず、ヨーロッパ中に轟いた。歴史学者のニッパダイは「この7人は自由主義の殉教者であり、英雄である」と言い。ほぼ10年後のフランクフルトのパウル教会での帝国議会開催につながることを指摘している。さらに「このような反抗は、ラディカルな者、作家、若い人たちや庶民からではなく、はじめて市民的体制の核になる者から出ていて、これは自然法や国民主権の名を借りた革命ではなく、非常違憲行為に対する法の名における反抗である」と言っている。まさしくその通りである。彼らに同情する者が各地で支援の手をさしのべる。

ヤーコプ・グリムはカッセルに住む弟で画家のルードヴィヒ・エーミルのもとに身を寄せる。将来の計画も、生活の術も分からない。

約11ヶ月後、ヴィルヘルムも妻や家族と共にカッセルに戻り、ヤーコプと一緒に生活を始める。二人には勤める場所もない。そのとき「ドイツ語辞典」編纂の話が入り、ヤーコプとヴィルヘルムは自分たちの年齢を考え、躊躇する。しかし出版社などの提案は「二人の思うように」とのことであったので、引き受けることになる。と同時にこれによって、少しは生計が潤うことになる。

10. ベルリンへの招聘とフランクフルト・パウル教会での帝国議会

1840年ベルリン大学からの招聘状が二人のもとに届く。これで二人はやっと息をつきベルリンへと移る。1841年のことであった。ベルリンに移るにあたっては、多くの人々の援助があった。特にベッティナが奔走した。もし彼女がいなかったら、二人のベルリン行きは実現しなかったかもしれない。

さて、ベルリンでのグリム兄弟はどのような政治的態度をとったのであろうか。

プロイセンのフリードリッヒ・ヴィルヘルム2世はベルリン大学の教授としてグリム兄弟を歓迎する。ヤーコプは「ドイツ法の遺物」と題して大学就任講演を行なう。この中でドイツ法の歴史と法の大切さと自由について述べている。なぜならプロイセンでも王の個人的な人柄で政治が行なわれているのを見て取ったからである。確かにヴィルヘルム2世は想像力豊かで、鷹揚で、芸術に関心を持ち、神経がこまやかで、ベルリン風の冗談をよくとばして、軍事的な方面にはあまり興味がなかった。一方、優柔不断で面倒な仕事や決定を避けた。彼が王位についた時、多くの政治的な囚人を釈放した。その中にはアルントやヤーンらもいた。王は常に人との調和を考えていた。むろん、それに批判する人もいた。革命派のシュタインは王を「空っぽで、怠慢で、卑しい」とこきおした。1841年6月ヤーコプはダールマンに宛て「私がここに（ベルリンで）吹く風の中から受け取ったものと言えば、より自由な憲法を实らせるには大きな障害が沢山あるということです。でもその要素は十分あります。・・・王について言えば、彼の足取りはふらふらと揺れ、信頼出来ません」書き、三月革命の前の時代にあって既にプロイセンの一番痛い点を指摘している。

1815年以来ドイツ各地で問題となった憲法の制定は、ここプロイセンでは拒否されてきた経緯があった。またドイツ統一議会開催の必要も唱えられたが、これもなかなか実現しない。そこでヤーコプはドイツ全土のゲルマニストたちの会議を提唱する。実現したのが1946年4月のことであった。フランクフルトのレーマー（市役所）で第1回ゲルマニスト大会が開催される。ドイツ中のゲルマン学の研究者たちが一堂に会し、ドイツ法、ドイツ史、ドイツ言語の領域で討論をし、分裂していて、しかも不穏の気配のある祖国が今こそ、リベラルで民主的なナショナリズムの中でドイツの統一を求めることが論じられた。議事に先立ちルートヴィッヒ・ウーラントの提案で、ヤーコプ・グリムが議長に選ばれる。弟ヴィルヘルムも出席していた。ヤーコプが選出された理由は彼が一流の法律家であるだけでなく、言語学者、歴史家であり、さらにゲッティンゲンでの英雄的な行動があったから

である。この会議ではドイツ憲法の制定が話題となった。ドイツ言語と文学の中にある精神的力、そこから生じる国民的意識こそが現実的な政治問題を解決する基礎となる。その意味にをいてグリム兄弟は『ドイツ語辞典』の編纂の続けた。この辞典の序文はゲッティンゲンの事件で始められている。そしてこの辞書は一つの教育の書として愛する祖国の祭壇に捧げられているのだ。

またヤーコプらは「ドイツ新聞（1847―1850発行）」の中で「われわれがドイツの統一や連帯を語る時、決して下心などにはありはしない。ただ精神的な祖国の統一を考えているだけである」とか「自由な意味での立憲君主制」を考えていることを明言している。この新聞の編者であるゲルヴィニウスはその後プロイセン政府を厳しく批判したため、ヤーコプは自分の意図とは異なるとして、この新聞から手を引くことになる。ヤーコプが求めたのは憲法の制定と国家の統一だけであった。それ以上の国家体制の変革、ましてや革命などは考えてはいなかった。このような考えはグリム兄弟、とりわけヤーコプは以前から一貫していたのである。

ドイツにおいて1840年代は憲法の制定と国家統一の機運が高まった年である。ところがこれに社会問題が加わった。この社会問題は瞬く間にドイツ全土に広がった。それは先ず財産や教育、さらに経済的にのし上ってきたブルジョワ階級が政治的にも影響を与えるようになってきた。特に貴族、軍隊、官僚、君主独裁制に対して。また警察や検閲、政党の禁止に対して怒りの声があがり、暴動が起きはじめた。労働者らは産業革命の影響を受け、その犠牲者となっていた。こうして彼らの悲惨な生活状況から政治的・社会的問題がその深刻度を増した。手工業者たちや小市民たちは工業化にともなって自分たちの生存が危険にさらされ、人口は増加したが、労働市場は停滞した。これに追い討ちを掛けたのが、1946年から47年にかけての農作物の不作であった。そのため多くの人々は飢えに苦しみ、プロレタリア化が進んだ。こうして、憲法問題や国家統一問題、経済・社会問題が政治の中心問題となっていった。これらの問題はドイツだけでなく、フランスでも深刻であった。1848年2月パリで興奮した群衆がパレ・ロワイヤールに押しかけ、バスティーユ広場でルイ・フィリップの王冠を焼いた。この影響はすぐさま連鎖反応のようにドイツにも現れた。先ずバーデン国のマンハイムで民衆の集会が行なわれた。報道の自由が要求され、関税の撤廃が求められ、政党の禁止をやめると陪審裁判の要求がなされた。これはミュンヘンやフランクフルトにも波及した。そして革命の不穏な空気は一気にヴィーンやベルリンに広がった。ヴィーンではリベラリストたちが組織し立ち上がった。学生や労働者がこれ

に加わる。メッテルニッヒは遂に退陣し、イギリスに逃亡する。

プロイセンでも市民が集会を開き、デモを行ない、請願書を提出した。集まった群衆はエスカレートして行った。ベルリンの通りという通りにはバリケードが築かれた。学生たちの間にも不穏な空気がみなぎった。そんな中であってヴィルヘルム・グريمは学生と共に彼の家から遠くないウンター・デン・リンデンの通りまで行った。大砲が鳴り響き、血の革命となった。1848年3月18日のことである。230名以上の死者が出た。そして3月21日、フリードリッヒ・ヴィルヘルム4世は黒・赤・金の腕章を付け、武器をもつ市民や大学の教授連、市議たちに向かって布告を出し、ドイツの統一と自由と憲法の制定を保証した。ヴィルヘルム・グريمは「今や新憲法が制定される。王は自分が認めたことをなにひとつ制限することはなかった。すべて彼から出たものである。彼を知らない人だけが、彼の思いやりのある高貴な心を疑うのだ」とほっとしてその喜びを表明する。しかしこれはやがて失望に変わる。この点ではヴィルヘルムの判断は驚くほどナイーヴで、全くおめでたい判断である。それは彼が政治家ではなく、学者であることの限界かも知れない。

フリードリッヒ・ヴィルヘルム4世は逡巡する。議会の開催、憲法に制定、関税の撤廃、自由の保証どれ一つをとってもヴィルヘルム4世にとっては本来飲めるものではない。しかし3月29日にはリベラリストのカンプハウゼンとハンゼマンにいわゆる「三月内閣」を組閣させる。この内閣は、王と革命に参加した者たちをおさめるため、プロイセンを立憲君主制へそしてブルジョワ社会へと変革することをねらった。極端な王政支持者らは反革命を持った。しかしヴィルヘルム4世は反革命のための軍隊を準備することはなかった。もしここで王が反革命に荷担して、兵を起こしていたら、パウル教会での国民議会はなかったであろう。

さて、三月革命の成果はドイツの国民議会開催という昔からの要求を生き返らせたことである。1848年4月フランクフルトのパウル教会で国民議会の準備会が開かれ、この準備会にはグريم兄弟揃って出席する。ここでは議題の整理がなされ、憲法の制定が正式議題として取り上げられる。一方各国の政府は、プロイセン王の言う「卑屈な気持ちで」、国民議会のための選挙を実施した。

1848年5月18日ついにパウル教会で第一回の国民議会が開催される。議員は800名で成り立っていた。その内訳は農民代表46名、産業界代表60名、貴族代表85名、学識経験者代表は609名（内大学教授49名）であった。グريم兄弟の内、弟ヴィルヘルムはこの本会議には出席せず、家族とともにベルリンに残り、兄ヤーコプは一人、議員として正式に出

席した。彼の座席は中央の演壇の真正面で、左右同派の真中に座り、中立であることを示していた。彼は演説をし、それが新聞に報道された。それによると「私は力強い王のもとでの一つの自由な祖国に賛成します。そして共和国といった全ての病的な欲望には反対です」と言明している。彼は、これまで君主から多くの失望を味わってきたにもかかわらず、国家の構造と国民社会の象徴的形態は立憲君主制にあることを確信しているのである。共和制は彼の意見によると人工的につくられたもので、歴史的に生成されたものではない。このような考えは彼にとってはリベラルな考えと矛盾するものではなかった。

本会議での彼の関心は憲法の制定にあった。彼はなぜこんなに憲法の制定にこだわったのだろうか。それは自由に対する法的な保証がほしかったからである。そして自由に対する彼の考えは常にドイツの統一と結ばれていた。王がいても法律で自由が保証されていれば、それで十分であるし、ドイツが一つであれば他国の侵略もないと考えたからである。これは彼の、いな、グリム兄弟の体験から来たものである。

ヤーコブは憲法草案の第一章の第一条に「ドイツ国民は自由であり、ドイツの地にはいかなる奴隷も許してはならない。この地に住む他国の人や自由を束縛された人をドイツの地は自由にしなければならない」と記し、第二条には「ドイツの土地にはドイツの船又はドイツの旗を付けた船が航行することが認められる。どのような奴隷もこれらの船の端に一步でも足を踏み入れるなら、ただちに自由となる」と書いた。第三条は「何人といえどもドイツ人は奴隷を保有してはならないし、直接的又は故意に或いは間接的に奴隷交換を意図したり、ただ奴隷を用いて実施される企画事業に参加してはならない」となっている。第四条には「このことに反したり、裁判によって罪が確定した人はドイツの市民権を失う」と記している。ヤーコブの理想がここに込められている。しかし、このヤーコブによる憲法草案は憲法小委員会で205対192票で否決される。その際、象徴的なのは南チロルの議員であるエステルレの指摘である。彼は「法規と信條は違う。自由は国家的な事柄ではなく、人類の問題である。考えてもみたまえ、全ての民族に自由を願わない人は自由を享受するに値しないよ」と言ったのである。これは論理のすり替えである。そのために憲法制定は見送られた。

その間にプロイセンでは反革命が始まっていた。亡命していた弟王ヴィルヘルムがリベラルな内閣によって帰国が認められたのである。パリでもヴィーンでも反革命軍が勝利した。そしてオーストリアはフランクフルト議会に憲法制定権のないことを宣言する。そこで議会はプロイセンを中心に非常にトーンダウンしたドイツ憲法を可決し、ドイツの皇帝

にプロイセン王の就任を求めた。だがプロイセン王はこれを拒絶し、派遣議員を解任した。

1848年10月ヤーコプ・グリムは失意のうちに国民議會をあとにし、ベルリンへ戻って行く。「法の灯が今や力によって消されました。いつまたその灯がともるのか、誰も知りません」とその落胆ぶりを示している。

そして最後の政治的発言として、ヤーコプの次の発言がある。「どんなに頻繁にわが祖国の悲しい運命が私の心に浮かび、気を重くし、生活を辛くしたことか。救いなどはまったく考えられない。救いは、大きな危険や革命によってのみ、もたらされること以外には考えられない。容赦のない力によってのみ救われるのだ。私は年をとればとるほど、より民主的に考える。もういちど国民議會に座れば、ウーラントやショルダーと行動をともにするだろう。憲法を無理に現状のレールに乗せることは平安にはつながらない。私たちは成果が多くあることのみ执着していて、生の形で力が出てくることを恐れている。祖国の偉大さが背後になれば、われわれの誇りなんて、どんなにちっぽけなものだろうか。学問というものの中には根絶出来ないものがある。どの学問もそれぞれの行き詰まった後には、新しく、それだけに一層力強く芽を出すものである」と。このことばをどのように解すべきなのだろうか。彼は過激な革命家となったのであろうか。あるいは立憲君主制を放棄して本気で共和制を望んだのであろうか。そうではなく彼のこころの逡巡と葛藤の表明であると解すべきであろう。また彼の学問への基本姿勢の表明ではなかろうか。とはいえ「より民主的に考える」というこのことばは大きな意味をもっているように思う。その後、グリム兄弟は最後まで「ドイツ語辞典」に全力を注ぐのである。

11. おわりに

以上で、二人の兄弟の政治姿勢や政治的な立場を検討してきた。彼らが時代の流れに、押し流されながらも、じっと耐えている姿が見られる。それともに、彼らは祖国を最後まで愛し続けた。決して王に対してへりくだったことはなかった。それはゲッティンゲンの事件からも分かるし、プロイセンに行ってもヴィルヘルム4世に媚びることがなかったことから十分理解される。立憲君主制を唱えても、その君主は抽象化された、理想的な君主で、決して現存の具体的な君主ではなかった。彼にとっては君主は法律の忠実なしもべでなくてはならなかった。ヤーコプは法に忠実でない君主には反旗をひるがえした。最後の政治姿勢に関する彼のことば「救いは大きな危険や革命によってもたらされる。・・・年をとればとるほど、より民主的に考える」は、行動にこそ表わさなかったが、大変重い

ことばとしてわれわれの心に刻まれる。

このことばは彼の祖国ドイツへあるいはヘッセンへの愛情があつてこそ出てくることばである。その祖国愛についてヤーコプは「ドイツへの愛とヘッセンへの愛というよりもっと遙かに強い糸が私の心の中やあなたの心の中で決して切れることはありません。われわれの命が続くかぎり、二人がもっている心の痛と悩みはなくなることはないかも知れませんが、でも、後から来る、より良き時代のより幸福な者たちは私たちが祖国高揚のため全力を尽くして共に努力し、共に力を出したというこの証を無にすることはないでしょう」と1854年5月25日カッセルの上級図書館司書ベルンダルディ宛ての手紙にしたためている。

兄弟は共にドイツの民話、伝説、童話を集めた。そしてドイツ文法や言語研究そして最後に「ドイツ語辞典」の編纂に生涯を捧げたが、それは祖国を愛し、ドイツ人のアイデンティティを求めたからであり、そのために彼らは単に書齋に閉じこもったり、民話などの収集に全力を尽くしたばかりではなく、祖国やドイツ人を愛するがゆえに体を張って戦ったのである。

参考文献

Gabriele Seitz : Die Brüder Grimm, S. Hirzel Verlag, Leipzig 1990

Hermann Gerstner : Brüder Grimm, Rowohlt Taschenbuch Verlag, Hamburg 1973

Ludwig Denecke u. Karl Schulte Kemminghausen : Die Brüder Grimm, Erich Röth-Verlag, Kassel 1980

Thomas Nopperdey : Deutsche Geschichte 1800-1866, Verlag C. H. Beck, München 1983

Kleinere Schriften, 8 Bde. Berlin 1864-1890, Olms Verlag, Reprint

(1995年11月8日受理)